

園名

荒川区立尾久第二幼稚園

テーマ

自然



テーマ設定の理由

自園は、生き物や草花、畑など身近な自然に触れる機会が多く、自然への親しみや関心をもつ幼児が多く見られているため「自然」をテーマ設定する。日常的な自然遊びがより探求的な遊びとなるよう、また自然事象を含む自然環境の工夫、デジタル機器等の活用の充実を図る。

活動スケジュール

令和8年6月～7月

- ① ヤゴの共食い ～エサ探し～
- ② ヤゴの脱皮、電子顕微鏡で観察
- ③ ヤゴがトンボに！でも雨が降っている…。

準備した素材や道具、環境の設定

- 幼児がじっくり話し合いを出来る場と時間の保障をした。
- 幼児が疑問に思ったらすぐに調べたり、観察したり出来るような道具を準備した。
- 話し合いを可視化できるよう掲示物を作成した
- ・ 電子顕微鏡 ・ トレース台 ・ タブレット
- ・ 図鑑 ・ NHK for school (動画)
- ・ エサとなる虫

活動事例①

～ ヤゴの共食い エサ探し ～

活動内容

幼児が、学級で飼育しているヤゴが共食いをしていることに気付いた。なぜ共食いをしてしまうのか、ヤゴのエサは何かということを図鑑や ICT 機器等を用いて調べる。また、家庭にも協力を仰ぎ、ヤゴのエサについて一緒に調べてもらう。

活動の様子

幼児の姿・声・幼児同士や幼児と教師の関わり

学級で飼育しているヤゴが水中で死んでいることに気付く幼児がおり、学級全体で話し合う場面を設定した。

教師が「水槽の中に半分になっているヤゴがいるね。」と話すと、「エサがなかったからかな。」「お腹が空いてヤゴ同士で食べちゃったってこと!？」とショックを受けた様子だった。

そこで教師が、共食いを防ぐためにどうしたらよいのか、ヤゴのエサは何かということを投げ掛け話し合いが始まった。「カエル」「ソーセージ」「キンギョ」「カメのエサ」「小さい魚」「葉っぱ」とそれぞれの考えを出し合う。キンギョやメダカは園内で飼育していることもあり、「(エサとして与えるのは) かわいそう」とつぶやく幼児もいた。翌日、意見の一つにあがった赤虫を準備し、ヤゴに与える。幼児の中には、生きたエサをあげることに驚く幼児もあり、「え! あげちゃうの?」「動いてるよ。」と話していた。水槽内に赤虫を入れると、すぐにヤゴが食い付く様子を見て「目が見えているのかな、どこに(目が)あるのだろう」「(赤虫は) 何で水の中で生きられるのだろう」と話す幼児もいた。また、ヤゴが赤虫を食べた後腹部が赤く透けていることやえさを食べる際に顔の下から何か出てくことに気付く幼児もいた。そこで教師は幼児と一緒に幼児の言葉や気付きを web マップにまとめ、ヤゴから派生した興味を一目で分かるようにした。その日の降園時、教師が「ヤゴは他にどんなものを食べるのかお家の人と調べてきてね。」と投げ掛けた。

週明け、ボウフラを家庭からもってくる幼児がおり、早速水槽内に入れて食べるか観察した。



活動事例②

～ ヤゴの脱皮 ～

活動内容

幼児が、ヤゴが脱皮していることに気が付いた。ヤゴが死んでしまったのではないかと心配そうに見ている幼児もいる中、学級全体で脱皮について資料映像を見ながら脱皮とは何かを調べた。

活動の様子

幼児の姿・声・幼児同士や幼児と教師の関わり

登園後、ヤゴが脱皮していることに気が付いた幼児が、「皮が剥けたってこと？」「死んじゃった？」と心配そうに虫かごを覗き込んでいた。そこで教師が事前に準備しておいたヤゴの脱皮の映像（NHK for スクール）を学級全体で視聴した。「何回も皮を脱いでいるけど、なかなかトンボにならないね。」「脱いだ皮は茶色いんだね。」「自分の力で脱皮できることがすごい。」「ヤゴの体が大きくなってきた時に（皮が）破れるのかな？」と思い思いに気付いたことを口にしていった。さらに教師が「脱皮する時の皮はどこから破れていくのだろう？」と投げ掛けると、A児が「こんな感じで脱ぐんじゃない？」と背中側から破れていく様子をジェスチャーで表していた。

その後、好きな遊びの時間に脱皮した皮やヤゴを電子顕微鏡で観察をした。電子顕微鏡でヤゴを見たB児は「（鼻のような箇所が）黒くなっている」「腕が黄色くなっているからもうすぐ出てくるかもしれない」と話したり、C児は「目が大きく見えるね」「2つピョンとついている角が面白い！」「それ、触覚じゃない？」と友達と会話をしながら観察を続けていた。

D児が「牙があるって書いてある。」「ヤゴははっきり大きな目がついている」と図鑑と見比べながら、電子顕微鏡を覗いていた。それを聞いていたE児が「この黒いところが目ってことだね。」「人間の目は白と黒があるよね。」と呟いた。そのつぶやきを聞いた教師がタブレットでヤゴの目について調べると、「目は大きい部分を指し、黒点は光が明るい時に動く」ということが分かった。するとD児が「電子顕微鏡の光を当てたら動くかもしれない。」と話し、虫かごに電子顕微鏡を当てた。しかし、変化はなくしばらく電子顕微鏡を当てたり離したりを繰り返し、ヤゴの目の変化を観察していた。



活動事例③ ～ ヤゴがトンボに！ でも雨が降っている ～

活動内容

育てていたヤゴがトンボになり、電子顕微鏡やトレース台の上にのせてトンボの体や羽が透けている様子を観察した。観察後、学級で話し合った結果トンボを逃がすことになった。しかし、外は雨が降っていて雨の中逃がしてよいのか疑問に思う幼児がいた。

活動の様子

幼児の姿・声・幼児同士や幼児と教師の関わり

学級で飼育しているヤゴがトンボになり、トンボの生態について電子顕微鏡等を使って観察した。その後、学級で話し合った結果トンボを外に逃がすことになった。しかし、外は雨が降っており、幼児も「雨の中で逃がすのはよいのだろうか？」と考える様子があった。すると、A児が「雨の日は（トンボは）どうしているのかな？」とつぶやく。それを聞いた教師が学級全体に「トンボは雨の日はどうやって過ごしているのだろうか？」と投げ掛けた。するとB児が「雨だから逃がさない方がいいんじゃない？羽に雨が当たって曲がっちゃう！」と話した。教師が「羽がケガしちゃうってことかな。そうすると雨の日はトンボはどこにいるのだろうか？」とさらに投げ掛けた。すると、C児が「葉っぱの下にぶら下がっているのかな？」やD児は「葉っぱのたくさんある森にいるんじゃない？」と次々に意見が出てきた。

教師が「それじゃあ、みんなはトンボは雨が嫌だと感じているということかな？」と投げ掛けると、答える幼児は誰もいなかった。そこで、教師も一緒に雨の日にトンボはどのように過ごしているのかを調べることにした。

好きな遊びの時間に、数人の幼児が図鑑やタブレットを使ってトンボについて調べると、「トンボは羽が濡れると重くて飛べないが、多少は濡れても平気である」ということが分かった。幼児同士が調べる中での疑問点を言葉にしながらタブレットを操作する様子も見られた。（トンボの飛行距離やなぜ羽が黄色いのかという疑問など）

振り返りによって得た教師の気付き

ヤゴを飼育する中で、幼児自身が自分の気付きを言葉にして呟いたり、友達と共有したりし、その気付きや不思議に感じたことを調べようとする気持ちが育まれたように感じる。また、好きな遊びの時間に調べたことを集合時に発表する時間を設けたことで、学級全体にヤゴに関する興味関心が広がった。これまでも繰り返し調べることを面白がる幼児はいたが、今回の活動では疑問が出た後、幼児なりに予想を立てたり推測をしたりする姿があり、その後実際に調べると新たな発見や疑問が次々に生まれ、活動に広がりを見せた。活動が断続的に続いたことで学級全体での興味関心がさらに広がっていったのではないかと感じる。

また、環境設定として新たな道具や映像媒体など、その時々に応じた最適な道具を教師が提示したことで図鑑だけでは調べられなかったことが、幼児の興味に合わせて深めていくことができたと感じている。さらにそれらの道具が幼児の手に取りやすい場所に設置したことも幼児の興味を継続させる一因だったのではないかと感じる。

調べて分かったことや疑問点が Web マップで可視化されて一目で分かるように整理されていたことが、学級全体で話題を共有しやすかったと感じている。